博士論文要旨（平成27年度）

平成27年度に提出された博士論文は、論文提出によるもの２編である。
論文の要旨を次に掲載する。

《論文博士要旨》

古墳時代社会の諸変革

—人・もの・情報の流れを通して—

富　山　直　人*

●論文の課題

本来、国家形成論は畿内の状況を中心に議論されてきた。その上で、畿内対周辺の対比という中心と周縁の概念による理解の中で議論が進む経緯があった。しかしながら、前方後円墳という対個人を示すモニュメントの存在を認めつつ、集落を対象とした視点から当時の社会や組織を復元することには極めて困難な状況に直面する。システム的な組織の存在を想定することは可能ではあるが、集落研究からはそれを指揮する中心を特定できないのが現状であろう。

また、これまでは、海外の研究成果を援用しつつ、日本の古墳時代が初期国家の概念に該当するかどうかの議論に終始してきたが、近年の動向としては、国家への発展過程は地域によって様々であることが明らかとなっている。

そこで、現時点で日本の古墳時代のどの段階が国家段階に該当するかどうかといった議論ではなく、社会発展過程の諸要素を改めて、検証し提示することが重要と考える。

その諸要素をアジア諸国などと比較可能な状況とすることが、今後の議論を発展させる上で、もっとも重要な作業となろう。

本論では、古墳並びに集落、人・もの・情報の動き、流通経路、渡来人をキーワードとして社会の変化を時期的に区分し、その中で、諸要素の実態を明らかにすることを課題とする。

具体的には

①渡来人の動向と流通経路の変化の追求

②畿内と播磨の関係について古墳と集落から検証

③集落から階層性と複合化を検証しつつ社会を復元

④量的な格差から質的な差への変換点を探る

などの検討をおこなう。

●論文の構成

第１章　古墳時代と基礎社会　－人・もの・情報の流れを通して－

第２章　古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交渉

第１節　播磨における古墳時代中期の政治変動　－古墳と渡来人の動向を中心として－

第２節　播磨における古墳時代の集落　－渡来人の動向を中心として－

第３節　摂津・河内の集落と流通経路

平成27年度　*神戸市立中央図書館学芸員

第３章　横穴式石室の導入と対外交流
第１節　横穴式石室内部の利用実態とその変化過程
第２節　芝山古墳の検討
1．芝山古墳
2．摂津周辺の九州系横穴式石室
3．九州系石室の分布とその存在意義
第４章　横穴式石室と地域間交流
第１節　前方後円墳への横穴式石室採用動向
第２節　大和周辺地域における実態の確認
第５章　原始から古代へ国家成立への発展段階
第１節　大和における石室分布の実態と時間的変化
第２節　大和周辺地域の動向と画期
第３節　群集墳の動向と被葬者
第４節　石室の移入の実態とモデル化
第５節　石室伝播からみた社会関係の実態
第６節　社会復元に向けて
第７節　まとめ
第６章　流通から見た国家形成過程　まとめにかえて

●論文要旨

第１章　古墳時代と基礎社会　－人・もの・情報の流れを通して－

古墳時代は再分配経済の範疇で理解されることがある。古墳時代の集落からは、防御設備に乏しく、日常的な戦争等の緊張関係は看取されない。古墳から観察される王権の強固な存在感に比べ、集落ではそれがほとんど実態がないかのようである。そこで、当時の社会を想定すべく、幾つかの状況を民族誌も援用し、G. ドゥルーズ以後、再評価が進む、G. タルドの「模倣論」を中心に据えながら、個人に注目して社会の復元を試みた。その場合、軍事的強制権がない社会におけるリーダーは、日々努力が必要で、その地位は、世襲制とはならず、かなり不安定なものとして結論づけた。さらに、食料の獲得、広域ネットワークについても言及した。

第２章　古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交渉

この章で集落と古墳の研究から、日本の社会の発展過程・中央と周辺地域の社会の実態を論じている。

第１節　播磨における古墳時代中期の政治変動　－古墳と渡来人の動向を中心として－

出土した埴輪を分類し編年を行った。さらに、出土遺物や長持形石棺の変化などから、播磨の古墳時代中期を３段階に分類した。その３段階は、王権にとって交通の要衝であった段階（１段階）、独自の渡来系要素の受容が認められる段階（２段階）、王権の中に徐々に再編成される段階（３段階）として理解した。

これらの段階は、王権における対外交渉のあり方の３段階変化に対応すると理解した。その上で、検証を重ね、前方後円墳から墳形が変化しても、一律に規制として捉えるべきでないことを明らかにした。

第２節　播磨における古墳時代の集落　－渡来人の動向を中心として－

播磨における渡来人の動向から、５世紀の集落内部での変化を探った。詳しくは、手工業生産における専業制は認められず、集落内部での格差は不明確で、中期前半と後半でも格差の進展は僅かであった。さらに、淡路の状況を検証し、流通経路が再三変化したことが確認できた。その上で、塩生産や玉生産並びに玉祭祀の広がりから、５世紀前半と後半には画期があると断定した。

第３節　摂津・河内の集落と流通経路

集落を分析した結果、各集落は１集団が集団規模の拡大による集住化の促進によって形成されたのではなく、複数の集団が区画された範囲ごとに隣接して居住していると結論づけた。そのため、集団は大きなまとまりへと進まず、分節化した状態で、相互に協業を行うことによって成り立っていた。古墳時代中期における集落内には、古墳に見られるような階層構造は認められず、格差も限定的と云わざるを得ない。

第３章　横穴式石室の導入と対外交流

九州系と大陸系の石室を複数の項目で分析し、分布からその意味を探った。

第１節　横穴式石室内部の利用実態とその変化過程

芝山古墳をはじめとする近畿地方における九州系の横穴式石室の遺物配置から、その傾向を分析し、大和で通有認められる百済系の横穴式石室における遺物配置や木棺の配置との違いを明らかにした上で、時期的変化から、その融合のあり方を明らかにした。

第２節　芝山古墳の検討

１．芝山古墳

大英博物館所蔵資料を資料化し、資料に基づき、芝山古墳の石室内の出土状況を復元した。

２．摂津周辺の九州系横穴式石室

播磨から丹波への九州系石室の分布実態を明らかにし、交通の経路を想定した。

３．九州系石室の分布とその存在意義

従来の流通経路を利用した中央による大陸との直接交渉とそれに伴う物資の独占が九州経由による複数のルートの出現によって崩れた状況を九州系石室の分布から読み取れる可能性を示した。その中心となるのが複数埋葬を導入している今城塚古墳と考え、大陸系石室と九州系石室の分布から、淀川グループと大和川グループに分け、対等な競争関係を想定し、これが、社会発展の出発点と評価できると考えた。

第４章　横穴式石室と地域間交流

横穴式石室を通して６世紀の社会を通観する基礎的作業を行っている。前方後円墳への横穴式石室の導入、ならびに各地への石室情報の伝播のあり方を検証している。

第１節　前方後円墳への横穴式石室採用動向

近畿地方で最初に前方後円墳へ横穴式石室が導入されるのは、北摂を中心とする地域であり、後に大和へと移り、継続的に築かれるようになる。これにより、両勢力の対立は、大和優位へと移行し、帰着を迎えたと考えられる。前方後円墳築造の時代は、量的な格差の時代であって、そこには、支配、被支配の関係ではなく、個別に共通性を共有する人間関係性の表現、さらにはネットワークに所属している集団の共通性への表明が見て取れる。

第２節　大和周辺地域における実態の確認

大和・河内で中心的な石室形態が周辺地域にどのような影響を与えているかを、基礎的に検証し、それを元に、地域間の情報の流れ、さらには関係性を明らかにした。

第５章　原始から古代へ国家成立への発展段階

横穴式石室の研究から、６世紀の社会について、検討を行った。

第１節　大和における石室分布の実態と時間的変化

独立墳から群集墳への横穴式石室の構築に関する情報の移入のモデルケースを明らかにした。

第２節　大和周辺地域の動向と画期

４章第２節の成果を元に、地域の動向を整理し、中央の状況と周囲への拡散状況から、画期を設定した。

第３節　群集墳の動向と被葬者

石室の埋葬原理を復元し、２棺埋葬から、多数埋葬への移行時期を探り、人骨の成果などから、大和では、MT85～TK43型式並行期に双系制の中でもやや父系よりへと変化し始めた部分を看取した。

第４節　石室の移入の実態とモデル化

摂津までの範囲を中心に対する周縁地域と捉え、播磨などの地域は、その外縁地域として捉えるべき地域とし、石室情報の流れをモデル化した。

第５節　石室伝播からみた社会関係の実態

石室の各地への伝播状況から、TK209型式を画期として、情報の制限の開始を確認し、量的格差からの脱却という大きな社会の変換点を設定した。

第６節　社会復元に向けて

大和においては２系統並立段階から量的な差の段階をへて社会の重層化は進むが、播磨ではそのような動きは取らず、社会の発展は、地域によって異なる。

第７節　まとめ

２系統の段階から融合の時期が経過するなかで、基礎的社会集団の構成が安定的な段階へと移行し、最上位の石室群と、下位の群をもうける動きは、対等な競合から発展して量的な差からの脱却ととれる。６世紀の社会は、在地首長制社会や大和のような前国家段階の社会、また、５世紀後半に直系による父系制社会へと移行した北部九州など様々な社会レベルが混在しており、社会の発展段階には地域差が存在する。

第６章　流通から見た国家形成過程　まとめにかえて

本論に関係する研究史を整理し、１章から５章までの成果を改めてまとめた。

《論文博士要旨》

古代日韓象嵌技術の系譜

—象嵌装飾出土遺物を中心に—

林　　志　　暎*

金属象嵌は、金属の地金に鏨で溝を彫り、金・銀などの金属象嵌線を嵌める技術である。本論文では、金属の材質にはじまり、金属線の製作、溝の彫刻、そしてそれを彫る鏨の製作など、象嵌製作に関わるすべての要素にもとづいて、日本列島の古墳時代と韓半島の三国時代の象嵌遺物を分類し、それらの技法的差異と類似点とを比較することによって、古代日韓における金属象嵌の製作工房やその系譜を探る。

金属象嵌は、その製作過程の特性上、肉眼観察による製作技法の特徴把握が困難である。それゆえ筆者は、象嵌遺物の肉眼観察にもとづきながらも、マイクロスコープやX線透過装置といった機器を積極的に利用することにより、象嵌遺物の技術的特徴把握とその製作実験との対比を通して、古墳時代および三国時代における金属象嵌技法の復元を試みた。この結果、古代日韓における金属象嵌技法において、象嵌溝には、従来指摘のある通り、蹴り彫りと毛彫り技法の二者があることを再確認し、一方、これまで指摘の少なかった象嵌線の製作技法について、鍛造のほか、巻きや捩じり、さらに折り技法といった多様な技法が存在することをはじめて明らかにした。

金属象嵌各技法の使用事例には、年代および地域差が認められる。そこで筆者は、象嵌溝と象嵌線の製作技法にもとづいて、それらの源流をユーラシア大陸に求めることで、韓半島の百済、新羅、伽耶、そして日本列島に至る象嵌技法の系譜を探究した。さらに、金製歩搖の起源ともかかわる細線細工技法の伝播ルートを参照しつつ、近年発掘調査されたロシアの初期鉄器時代の象嵌事例や、前漢代まで遡る中国象嵌銘文大刀などに基礎をおいて、各技法の組み合わせの年代的、地域的位置づけを整理することによって、古代日韓の象嵌技法へと至る系譜が、毛彫り技法の溝、巻きや捩り技法の線を特徴とする「北方ルート」と、蹴り彫り技法の溝を特徴とする「中国ルート」の２つに分けられるとの仮説を提示した。

そして、その仮説の上に立って、日韓の金属象嵌遺物の技術的位置づけをとらえ直した場合、従来指摘されてきた、北方ないし中国から百済ないし伽耶を経由して日本へと至る伝播イメージとは異なり、その間には高句麗が介在した可能性のあることを新たに指摘した。

第Ⅰ章の象嵌技法の定義では、金属象嵌とは何かについて、これまでの金属象嵌研究において扱われてきた従来の定義のもと、各々の技法と工程についての概略を説明する。さらに用語問題として、特に韓国で近年、象嵌に代わって使用され始めた「入絲」という用語についても触れた。

平成27年度　*韓国国土釜山大学校考古学科専任待遇講師

第Ⅱ章では、本論の立論に最も重要な、象嵌における諸技法を解明する方法として製作実験を行う。実験は嵌入材料としての象嵌線製作と、嵌入部となる象嵌溝を彫る鏨の製作、これによって形成された象嵌部の観察結果と出土遺物に残された痕跡とを比較する方法によって象嵌線の巻きや捩りによる製作技法、あるいは蹴り彫りや毛彫りによる象嵌溝の彫法などの解明を、実物観察とともに実体顕微鏡やＸ線透過撮影、Ｘ線ＣＴ画像の観察を並用して行う。

第Ⅲ章では、西アジアやヨーロッパの技法については先行研究に依拠しながら、韓国、日本の象嵌遺物については文献のみならず、実物資料を重視しながら、これまでの日韓において、鍛造や線引き以外に言及されていなかった、細線細工の製作技法について述べる。細線細工の技法は、金属象嵌においては嵌める対象となる金属線の製作技法に繋がる。金属線の表面に残る痕跡に着眼し、近年、調査、報告された韓国の王宮里遺跡の工房廃棄地から出土した多くの加工中間段階の金片、金棒や金糸、細線の製作痕跡の観察から、金細工の製作過程を推定、各製作技法にもとづいて、細線細工遺物を「鍛造」、「板引き」、「引抜板」、「捩り」、「巻き」、「折り」、「鋳造」に分類、細線細工遺物の観察に関する新たな見解を整理してまとめた。

西アジアおよび地中海地域、スキタイから中央アジア地域、中国、韓国、日本の事例へと拡大して、特に、直径0.3～１㎜の巻き、捩りによる細線は、近くは中国三燕の遺跡として有名な房身、馮素弗墓出土冠飾りの細線装飾に用いられた製作技法と類似する。これらの細線の起源は、紀元前８世紀頃まで遡り、ギリシャ、エトルリアで技術上の全盛期に達する。また、黒海沿岸のクル・オバ遺跡やカザフスタンのイッシク古墳、ティリヤ・テペ４号墓の金装飾板の歩揺を繋ぐ金線としても使用されることから、細線製作技法によってその源流を探ることが可能である。

日韓における同技法は、韓半島では王宮里以前の象嵌大刀のほか、皇南大塚の金鈴、金象嵌釧にみられ、日本では６世紀後半以降、象嵌技法にのみ採用が確認される。

また、これまで言及されてきた、ロシア南部のサルマタイ出土金冠→アフガニスタンのティリヤ・テペ６号墓→中国の燕地域→遼西房身、十二臺→馮素弗墓→慶州皇南大塚、金冠塚→日本の藤ノ木、あるいは、房身２号金製方形板→皇南大塚→新沢千塚126号といった金製歩揺の起源についても、皇南大塚、金冠塚や新沢千塚126号出土の金線製作技法が、鍛造や板引きによるもので、金線の製作技法の面からはほかと異なり、少なくとも、房身、馮素弗墓まで繋がる捩りや巻きによる金線の製作技法が、日韓の出土品には見られないことも明らかにした。

第Ⅳ章では、日本の古墳時代と韓半島の三国時代の出土象嵌遺物について、地域ごとの出土事例を紹介し、象嵌製作技法である象嵌溝と象嵌線による分類を行った。

取り上げた象嵌遺物は、肉眼ないしマイクロスコープによる観察、またはＸ線フィルム観察を行ったものである。韓半島出土遺物としては、高句麗地域の伝平安南道中和群出土金象嵌銅魁のほか２点、百済地域の瑞山副長里や天安花城里出土の大刀９点、鉄製装飾遺物２点、咸安道項里馬甲塚ほか伽耶地域出土の大刀16点や陜川玉田馬具１点、近年、報告書再刊行に伴い新たに発見された天馬塚など新羅地域出土の大刀６点と馬具３点をその対象とした。日本出土遺物は、象嵌位置ごとに掲げると、刀身部象嵌大刀12点、環頭や円頭、方頭、頭椎大刀19点、柄頭、鍔象嵌事

例51点、鞍２点である。

象嵌溝による分類では、蹴り彫りと毛彫りの大きく２つに分類できる。韓半島においては、高句麗で蹴り彫りのみ、百済、新羅、伽耶では蹴り彫りと毛彫りが共存しており、その中でも新羅における蹴り彫り技法の出現が他の地域より若干遅れる傾向がある。日本における蹴り彫りの事例は、奈良県東大寺山古墳出土中平銘鉄刀に早く出現するが、それ以降は年代の離れた７世紀代の遺物に稀に確認できるのみである。蹴り彫り技法は、前漢代の象嵌銘文大刀にも確認でき、その技術の伝播ルートにかかわる一つの根拠となる。

象嵌線に関しては、巻き技法が咸安道項里馬甲塚出土品にもっとも早く現れ、６世紀代に盛行、日本では６世紀前半に出現し、６世紀後半から７世紀前半にかけて盛行するという年代差を見出すことができる。また、新羅では、象嵌技法の出現が百済や伽耶よりやや遅れながらも、折り線など、特徴的な象嵌線の事例も確認できる。

第Ⅴ章では、象嵌溝と象嵌線の製作技法をもとに、それらの源流を探ることで、高句麗、百済、伽耶、新羅、日本出土の象嵌技法の系譜を求めた。

まず、象嵌溝における蹴り彫り技法は、中国に求めることができる。前漢代の象嵌銘文大刀である江蘇省徐州市銅山県駝竜山出土建初二年銘金錯鉄剣（AD77年）、山東省蒼山県出土の永初六年銘金錯鉄刀（AD112年）など、すべて鉄地で蹴り彫り技法により文字の形の溝が彫られた事例であり、奈良県東大寺山古墳出土中平銘鉄刀も同技法による。また、事例も少なく、伝世品ではあるが、高句麗地域出土の遺物２点もともに蹴り彫り技法の象嵌である。新羅地域における蹴り彫り技法の出現が若干遅れるとはいえ、百済、新羅の両地域では蹴り彫り、毛彫りともに年代差なく共存するのに対し、日本においては、東大寺山古墳出土遺物を除くと、７世紀になるまで蹴り彫りの事例は確認できない。

毛彫り技法の象嵌の事例は、紀元前５～４世紀頃のロシアのフィリッポフカまで遡る。日韓出土遺物との直接的な関連を求めることには、やはり年代や地域的な隔たりがあるが、全般的な金工技術などとともに北方ルートを介しての伝来を伺うことは可能といえる。

象嵌線については、特に巻きや捩り技法を中心に言及が可能である。巻きや捩り技法は、ギリシャ、エトルリアに発し、イッシク古墳、ティリヤ・テペ、内蒙古达茂旗、遼寧省房身、喇嘛洞、馮素弗墓、甜草溝M1号へと繋がるその延長上に、高句麗をはじめとする韓半島の諸国があり、最後に日本列島へ至ったのだと考えられる。ただし、これまでの系譜論で根拠とされてきた、皇南大塚、金冠塚、藤ノ木、新沢千塚126号出土の金製歩揺連結線には、上記の技法を確認することはできない。むしろ、その技法は、韓半島においては６世紀から７世紀、日本では６世紀後半から７世紀代に出土する象嵌遺物において盛行することを明らかにした。

日韓における象嵌技法は、象嵌溝と象嵌線の製作技法から、北方ルートと中国ルートの２つに分けることが可能となる。前者は、毛彫り技法の溝と巻きや捩り技法の線を特徴とし、後者は、蹴り彫り技法の溝によって特徴づけられる。

日韓における金製歩搖の起源とされる馮素弗墓、房身２号では、巻きや捩り技法による金線が

見られるのに対し、その延長上に位置づけられる皇南大塚、金冠塚、藤ノ木、新沢千塚126号にはそれがないこと、また、一貫して中国の影響を受けたとされてきた百済の環頭大刀において、同時期の中国で普及していた巻きや捩り技法の象嵌線が、新羅や伽耶よりやや遅れるか、ほぼ同時期に出現すること、そして、日本列島において、巻きや捩り技法の用いられた象嵌大刀が、6世紀後半になって東日本を中心として急激に増加することなどを本論は個別に明らかにしたが、この結果は、従来指摘されてきた日韓間の金工品の伝播のイメージとは異なる。

本論では、象嵌技術あるいは金工技法とその系譜に着眼した場合、高句麗の存在抜きには考えにくく、北方および中国ルートを介して日韓に象嵌技法が伝播するにあたって、高句麗が介在した可能性のあることを対案として提示した。